2024 年 7 月 18 日（木）

第Ⅲ期　「仙台・羅須地人協会」セミナー

担当：半田　正樹

「大内秀明経済学の解読」

第 1 回 大内経済学の概要

はじめに

「仙台・羅須地人協会」の会員の方々にとっては、大内経済学とは最終的に「コミュニタリアニズム」（資本主義に対するオルタナティブではあるものの従来のいわゆる「社会主義」とは区別される概念）に集約される学説ということで理解されているのではないでしょうか。これをやや詳しくいえば、以下のように整理できると思われます。

晩期マルクスが、共同体に強い関心を寄せながらモルガンの『古代社会』の研究を深め『古代社会ノート』を残したこと。ウイリアム・モリスが、こうしたマルクスの研究動向に触発されながら、家族や共同体についての議論を展開したこと。「大内コミュニタリアニズム」は、こうした晩期マルクスの思想やウイリアム・モリスの考えをふまえた議論であり、同時にウイリアム・モリスから強い影響をうけた宮沢賢治の思想とも符合するものにほかならない、このように理解されていると思います。

もちろん、「大内コミュニタリアニズム」の形成にとっていわば「導きの糸」となったのが、大内の生涯の師、宇野弘蔵が提唱した「社会的労働協同体」という概念でした。この点も了解されていると思います。ちなみに、宇野弘蔵の「社会的労働協同体」というのは、資本主義に特有な「経済法則」とは区別される、あらゆる人間社会に共通の「経済原則」にかかわる概念であるということはとくにおさえておく必要があります。

すなわち「大内コミュニタリアニズム」は、ひと言でいえば、晩期マルクス、ウイリアム・モリス、宮沢賢治、宇野弘蔵の思想・理路の延長上に形成された「学説」と理解されているといってよいと思います。しかし、「大内コミュニタリアニズム」は、いわば晩期大内の学説・思想であり、その意味するところは、実質 1960 年代前半に始まる大内の研究や諸活動（大学・学会・革新仙台市政＝島野市政・社会党・シンクタンク・市民活動・労働組合・協同組合・マスメディア etc.）の過程をたどることによって初めて明らかにできると考えるのが正解だと思います。

大内秀明学説の形成と全体像　（著作一覧を参照）

大内先生が著書の刊行に初めてかかわったのは、1960 年刊の『経済学原理論（上)』（鈴木鴻一郎編・実質的編者＝岩田弘）でした（流通形態の項などを担当)。その後、4 冊の他編者の著書において執筆しながら、1964 年に単著『価値論の形成』（東京大学出版会）を上梓しました。同書は博士論文をまとめたものであり、その後学会においても高い評価を得てきた著書です。いわゆる純粋資本主義論の立場を一貫した大内が、「価値」についてい

わば資本主義に固有の「形態」という概念において明確に示した論稿といえばよいでしょうか。

そこで、あらためて大内先生の著作一覧をおさえながら、大内の学説を整理することにします。

著作一覧からわかるように、他の編者の図書への執筆も含めて、刊行した著書は計 54 冊にのぼります。そのうち単著は**ボールド(太字)**にした 19 冊です（単独編集の『賢治とモリスの環境芸術』を含む)。

ここではさしあたり、この単著 19 冊を手がかりとして大内経済学の全体像に迫ってみようと思います。

そうすると、19 冊の著書は大きく３つに分類できるように思われます。結論的に言えば１つは**「原理論(原論)・理論」**関係（A)、２つめは**「実証分析・現状分析」**関係（B)、3 つめは**「オルタナティブ論」**（C）です。

ただし、３つめの「オルタナティブ論」は、さらに「**理論的接近**」と「**具体的提案**」と「**コミュニタリアニズム論**」に分けられるように思います。

そこで、それぞれ A、B、C（Ca、Cb、Cc）と呼ぶことにして、19 冊を対応させると以下のように整理できると思われます。

A「原理論（原論)・理論」

1964『価値論の形成』東京大学出版会

1966『景気と恐慌』紀伊國屋書店

1971『宇野経済学の基本問題』現代評論社

2005『恐慌論の形成』日本評論社

B「実証分析・現状分析」

1970『転機に立つ日本資本主義』現代評論社

1972『多極化のなかの日本経済―戦後体制の崩壊と再編』河出書房新社

1974『日本資本主義の再編成』現代評論社

1990『ソフトノミックス』日本評論社

1999『知識社会の経済学――ポスト資本主義社会の構造改革』日本評論社

C「社会主義論・オルタナティブ論」

Ca　理論的接近

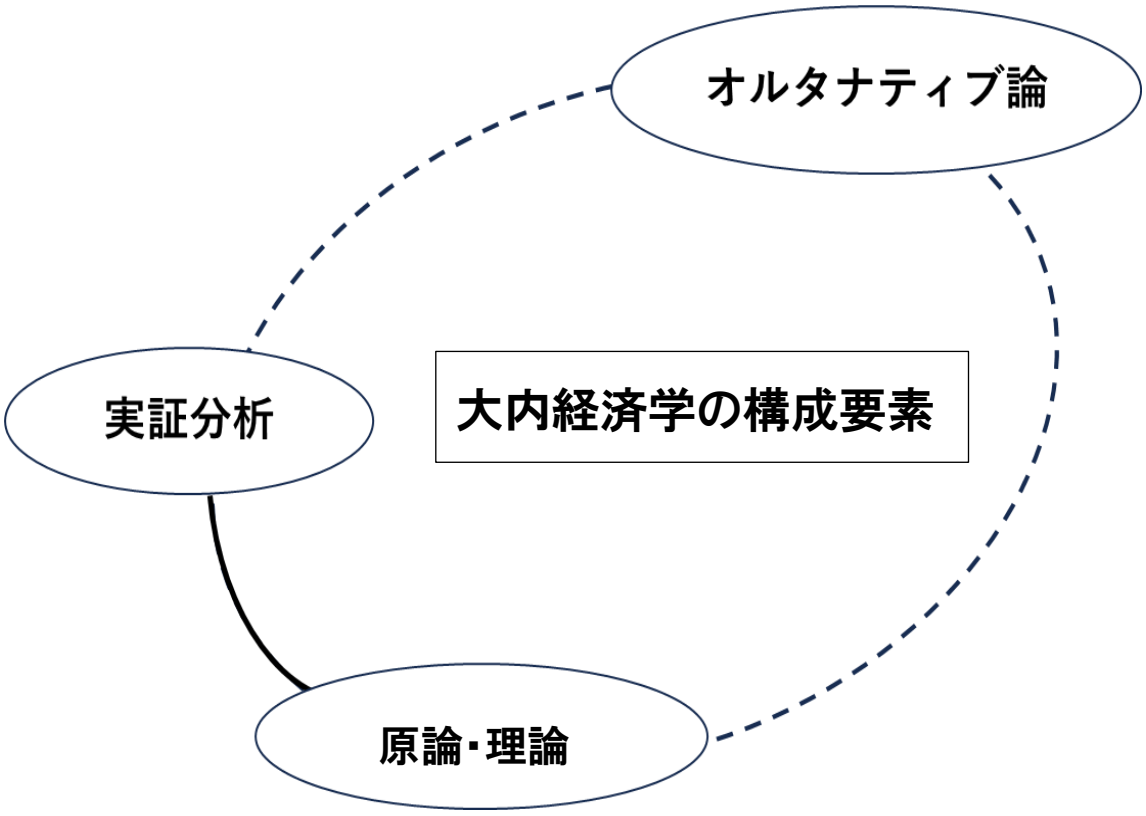
1984『『資本論』の常識』講談社

1991『もう一人のマルクス』日本評論社

Cb　具体的提案

1989『連合新時代の構図』第一書林
1990『新しい現実と社会民主主義』第一書林
1991『世界と日本・新しい読み方』講談社
1998『東アジア地域統合と日本経済ーアジア単一通貨への道』日本経済評論社

Cc　コミュニタリアニズム論
2007『賢治とモリスの環境芸術』大内秀明編集、時潮社
2012『ウィリアム・モリスのマルクス主義』平凡社
2020『日本におけるコミュニタリアニズムと宇野理論』社会評論社
2022『甦るマルクス――「晩期マルクス」とコミュニタリアニズム、そして宮澤賢治』社会評論社



第 2 回以降、各回原則 1 冊ずつ取り上げて、大内経済学の全体像をつかむことにしたいと思います（複数回の書もあるとすればちょうど 2 年)。「理論・原論」→「実証・現実分析」→「オルタナティブ論」とたどることになりますが、著作（単著）を時系列的に追うことにはならないので、すなわち著書は「理論・原論」と「実証・現実分析」が交互になったり、さらに「オルタナティブ論」もあいだに入ったりしているので、「理論・原論」→「実証・現実分析」→「オルタナティブ論」とたどったとしても、他の構成要素の発展過程を確認しつつ、大内経済学の 3 つの構成要素の展開を追跡することになると思います。その結果として、最終的に、大内経済学の全体像に迫ることができるのではと考えます。